

尾竹一枝と女性ひと

大東文化大学名誉教授 渡邊澄子（会員）

雑誌『番紅花』の位相

皆さんには興味はおありにならないだろうと思われる私の大好きな女性ひとについて書かせていただきます。『青鞥』という雑誌名とこの雑誌の創刊者・平塚らいてうについては周知のことでしょう。コンパクトな辞典にも載っている『青鞥』

は一九一一年（明治四四）年九月、女性の手になる初めての雑誌として発刊された、文芸作品の発表、新思想の紹介と共に婦人解放を叫んだ雑誌と書かれています。らいてうも人名事典類には『青鞥』の創刊者であり、女性解放、家族制度否定者として、戦後は平和運動に挺身した女性と位置づけられ高ランク扱いで記されていて、この構図がカノン化されています。誤りとは言えませんが真相は少し違います。『青鞥』は尾竹一枝の登場なしには

以上のように位置づけられる雑誌にはならなかったのです。先走ることになりますが、世界的陶芸家として重要無形文化財保持者（人間国宝）、文化勲章受章者に富本憲吉がなったのは憲吉と結婚した一枝の力に負うところが大きいのですが、一枝を採りあげた辞典・事典は寡聞にして見当たりません。

知れば知るほど惹かれる一枝について本務の間を縫って二〇年にわたって調べたことの表層部分を書いただけでも一千枚になってしまったのを、削り削って約半量近くにして『青鞥の女・尾竹紅吉伝』（2001・3、不二出版）として上梓してからもう二〇年も経ってしまいました。集めた資料はミカン箱六箱。恣意的にひと箱開けて見たら削った部分なのか前著には使っていないなかった興味津々の資

料（沢山の手紙や写真を含む）が出てきて、私のなかの熱気が炎を上げました。そこで、限られた紙幅内では何事も言い得ないかとは思いますが、こんな女性がいたということをやわ撫でにならざるを得ないとしても紹介したいのです。



順序として『青鞥』創刊者のらいてうについて簡略に述べる。本名平塚明（1886・2（1971・5））は後に会計検査院次長になった高級官僚の父の三女として東京に生まれ、日本女子大学家政科卒後、禅修行と並行して成美女子英語学校に通い、生田長江によって開設された「閨秀文学会」に参加という当時においては最高の学歴をもつ。美しく利発な明に魅せられた講師の森田草平（東京帝

国大学卒、漱石の弟子」と塩原尾頭峠で「学歴ある男女の心中未遂事件」を起こし、スキャンダルとして世間を騒がせた。心中などは知識人のすることではないというのが当時の認識だった。世間の非難に怯まぬ人物を見込んでのことだろう、長江が明に女性による女性のための雑誌発刊を熱心に勧めたのだった。雑誌発行など興味も関心もなかった明に刊行を決意させたのは、その頃、平塚家に職探しのために居候していた姉の女子大での友人保持研がチャンス到来とばかり私が手伝うからと長江の提案に承諾を強く迫ったことによる。明にとっては心ならずの発刊（1911・9）だった。資金は明の婚資から母が百円出してくれた。文学を志す女性の発表の場の提供が目的で女性解放意識はなかったが、雑誌刊行は男のすることだったので珍しがられたものは歴史に燦たる地位を築くに至ったのは尾竹一枝入社による。そこで、尾竹一枝について略記したい。

一枝（1893・4～1966・9）は日本画家の雅号越堂（本名熊太郎）とウタ（富山藩の高級武士を出自）の長女として富山市で生まれた。祖父は新潟で紺屋業の傍ら絵師として土地の娘に押し

絵を教えたりして親しまれていたが派手な女出入りで産を失い、義務教育制度が実施されたが授業料が払えず、子どもたちは小学校教育も受けていない。熊太郎は自由民権運動家として板垣退助の自由党で活動し、雅号「越堂」は伊藤博文の命名によるという。十七歳時から『絵入り新潟新聞』の挿絵を描いていたが富山に移住、兄を追った二弟と共に『富山日報』の連載小説の挿絵、売薬行商人の配りものの絵を描き、売薬絵師の中軸を三兄弟が担ったが、間もなく竹坡（本名染吉・国観（本名亀吉）の二弟が東京に去ったため富山版画は越堂の独擅場となり、今なお、富山県史を代表する売薬史に越堂の名は欠かせない。越堂には発明癖があつて、脳裏に閃くと本業そっちのけで寝食を忘れて熱中するので母は苦労の連続だったらしい。規模壮大な企画はすべて挫折し、成功例は上野公園にある現在の東京美術館だけだったようだ。三兄弟中、最も有名なのは無鑑査に推薦された竹坡だが、彼は四歳の頃から神童と言われ、国観も『小国民』主催の全国児童画で一等賞となり、三兄弟による『小国民』挿絵は鏑木清方を感じさせたという。以前の目黒の雅叙園には百段階段前の大部屋「漁樵の間」は襖も天井もすべてが竹

坡の絵になる竹坡の間で、広い本館玄関の天井絵も竹坡だった。廊下には巨大な国観の絵が飾られていた。日本画壇で横山大観と双璧をなした「尾竹三兄弟」だったが後には文展派によって憂き目を見ることになった。大観の師でもある岡倉天心が学のないのが惜しいと言ったという。

一枝は「尾竹家に官僚と軍人はいない」を誇りとする家に、父や叔父の幼少時の苦節の過去を知ることもおおらかに育ち、夕陽丘高等学校（第一期生。現夕陽丘高等学校）では校内一の人気者でエピソードに富む。父は一枝を「閨秀画家」にしようと下校後の課題としてその日の新聞の連載小説の挿絵のほかに「前賢故実」「信貴山縁起」「福富草紙」などの模写を命じた。日本画を好きになれない一枝は腹痛や怪我の仮病を口実にして、隠れて読書に熱中した少女だった。東京に行けば生きたい生き方が見いだせるという東京幻想を叔父竹坡の助言で果たしたが、東京美術学校（現東京芸術大学）はまだ女子に門戸を閉ざしていたので仕方なく、日本画専科だけの女子美術学校に寮生となって入学した。だが授業の古くささに耐えがたく、写生用に配られる薩摩芋や栗などを暖房用の火鉢で焼いて

食べてしまったり、林檎や梨は半分食べて立体感の出し方を考えたりといひ加減に過ごしていたが、一枝が竹坡の姪と知った主任教師の川端玉章から特別扱いされ、我慢がでなくなつた時洋画科新設と聞き、転科の許しを願う手紙を父に出したその返事も来ないうちに寮監と喧嘩して退学してしまい、竹坡の家の家事手伝いの傍ら絵の勉強をするようになる。内弟子の何人かのなかには落谷虹児もいた。

『青鞥』との出会いは庭掃除をしていたところに来た郵便配達夫から渡された郵便物に叔母宛があつて不思議に思ひ裏返して『青鞥』の文字に電光が走つたのだった。著名人の「夫人」宛の『青鞥』購読勧誘状だった。東京での友人、画家小林清親の娘で青鞥社社員になつていた仏英和高等学校専攻科（現白百合学園中学校・高等学校）在学中の小林哥津の紹介でらいてうに会ふとたちまちらいてうの魅力の虜になつてしまつた。らいてうに表紙絵を描いてみないかと言われて雀躍した一枝はその頃読んだ『白樺』掲載の南薫造の「私信往来」で制作欲に溢れながら方向が定まらず苦悩する芸術家が富本憲吉と知ると奈良まで会いに行く。この時描いた表紙絵「太陽と壺」は第二

巻第四号の表紙を飾るが憲吉の手は入っていない。初対面のこの時、興奮したのは憲吉だった。美術学校在学中に約三年間、その間卒業も果たして、ヨーロッパ中心に世界各地を巡る私費留学によって近代を体験してきた憲吉にとって、帰った故郷の奈良安堵村の陋習囂の現実は息づまるものだった。そこに飛び込んできた垢抜けて天真爛漫な美感覚の鋭い紅吉（『青鞥』での呼称。べによしのつもりだったが「こうきち」に定着）に魅

せられた憲吉はラブレターと読める手紙の矢を放つたが、らいてうに夢中の紅吉には通じない。その頃一家は大阪に居住していた。大阪で公演中だった「人形の家」の観劇評をらいてうから頼まれると、岩野泡鳴訳の本を買つてきて徹夜して読んで感動し、らいてうの指示にはなかったのに開演前の泡鳴と松井須磨子にインタビューをしている。泡鳴の須磨子溺愛ぶりが何気ない筆致で描かれる。舞台の須磨子の演技に興奮し、これも指示外だったが観客から感想を聞き回っている。夫を捨て、子まで残して家を出るなんてとんでもない、が大方の感想だったことに、日本の女はあれじゃダメだ、「人形の家」が言いたかつたのは、女性自身を高め男性と対等の思慮、判断力を持たなければ真の結婚は得られぬということではないか、と書いている。ここには直覺的フェミニズムが見られるが、一九二二年、紅吉十九歳の時であることに感心させられる。須磨子と仲良しになる。

この年の四月、当時の代表的画会だった異画会の第十二回異画会展が上野竹ノ台陳列館で開催され、初めて描いた一枝の「陶器」が出品総数四百一十一点中十三番で、金賞なしの三等賞銅牌を得て「天才少女画家出現」と新聞に大きく報じられたのだった。鏑木清方、山中敬中、今村紫紅、安田靫彦、上村松園らに竹坡、国観の加わる代表的画家十七名の審査員が作者名の伏せられた絵に点を入れその合計点でランクが決まる規則になつてい

る。一枝が出品していることを知っている竹坡と国観は一枝には点を入れていない。兄弟や身内の出品作に点を入れないのは減点になつて不公平だと越堂が『多津美』に書いている。妥当な論だろう。

五月十三日は紅吉の一枝にとって生涯忘れられない日だ。紅吉の受賞とズーデルマンの「故郷」にマグダの妹役で出演した林千歳を祝うミーティングが一枝の家で開かれ、会は盛り上がり泊まり込み

になった。この夜、らいてうがしかけた「同性の恋」に紅吉は舞い上がったのだ。隠すことを知らない紅吉は嬉しくて早速書いた。ふた月先の八月号にらいてうもはっきり「同性の恋」と書いている。舞い上がった紅吉はらいてうの力になりたい一心から、『青鞥』への広告を貰いにレストラン兼バー「メイゾン鴻の巣」に行くと、店主が作ってくれたカクテルの美しさに飲んでもいないのに酔いしれたのだった。当時はまだ一般家庭はランプで、食器は瀬戸物だった。電気の光に煌めくガラスの細長い器に注がれた五色の酒の美しさに画家でもある紅吉は興奮した。男女交際のできる時代ではなかったが、そんなことに頓着しない一枝は「パンの会」「三田文学」「白樺」の人たちと恬淡と交流していて、その誰かに連れて行ってもらったことがあったのだろう。「鴻の巣」の広告は七、八月号に載っている。折も折、『青鞥』に好意的で物心両面から何かと援助してくれていた竹坡から、女性解放を目指すなら、暗闇で働かなければならない女性のいることも知るべきだと言われ、らいてうと中野初と三人で、竹坡の馴染みの吉原でも格式の高い妓楼「大文字楼」に竹坡のお膳だてであり、東京女子高等師範学校（現お

茶の水女子大学）付属女学校卒という花魁栄山とお寿司を食べながらお喋りして、隣室に一晚泊まったのだった。一枝に差別観は一切ないので浅草で白首と話したりもしたことが、誰が吹聴したのか尾ひれをつけて「赤や青の酒をのむ新しい女」「新しい女、男女同権を主張して吉原妓楼に遊興す」「白首と別懇な紅吉子」とジャーナリズムは競って書き立てた。青鞥社は女徳を汚す不良集団のレッテルを貼られて女学校は読書禁止としたが、面白いことに、やがて入社した理論家の上野葉子は女学校教師だったがむしろ生徒に購読を奨励した。その時の生徒に青鞥入社者が出ている。

紅吉に軽度の肺疾患がみつかり茅ヶ崎の南湖院に入院した。ここは国木田独歩終焉の地である。今は高齢者の介護施設「太陽の郷」になっているが、日本女子大学校医の高田畊安医師による独特の結核治療法で有名だった。紅吉の入院に付き添う形でらいてうが近くに部屋を借りて移ってきたので編輯室が茅ヶ崎に移転した形になり、紅吉を嬉しがらせた。らいてうが紅吉の部屋にいたそこに、見舞いを兼ねて編輯の打ち合わせに来た東雲堂の西村陽吉に見知らぬ若い男がついて

来た。途中で偶然に出会って言葉を交わした画学生だが、評判のらいてうと紅吉への興味から願っての同行だったらしい。だが、らいてうと男が顔を合わせた瞬間の反応に敏感な紅吉は戦慄した。時経ずに男はやってきてらいてうの部屋に行き、らいてうは彼を泊めたのだ。紅吉の激憤に保持が、後に伊藤野枝が「あの時の平塚さんは本当にひどかった」と書いているが、紅吉にとっていかに残酷だったか。らいてう自身が紅吉との「同性の恋」について、「紅吉を自分の世界の中なるものにしようとした私の抱擁と接吻がいかに烈しかったか、私は知らぬ」などと「同性の恋」という用語を使って何度も書いているのに、二人が事実婚に入るとあの日のことを「同性の恋」なんかではなかった、それが証拠に今の奥村との生活がある、と書いている。卑怯ではないか。ついでに先走るが、奥村は画家として大成せず、終生敬愛し続けた一枝によってらいてうはどれほど援けられたか挙げたらキリがない。戦時下では真っ先に疎開したことを先見の明と誇り、皇室礼賛、戦意昂揚、優性論など戦急迎合の発言が多く見られるが、一枝には一切ない。戦後は疎開地に居続けるつもりだったのを、一枝が新しい時代の先頭にたつべき

と引っ張りだし、栄光の晩年を持てたのに、一枝の死に際しての悼辞は情のこもらぬそけないものだった。らいてうについては賛辞ばかりでそのような面を目をとめる論は見いだせない。

退院後、新しい表紙絵を描いてこなければらいてうの部屋の数居は跨がせないとわれ、近代の息吹を吸い込みたくて憲吉を再訪。喜んだのは憲吉だった。だが、らいてう一辺倒の一枝には通じない。この時描いた表紙絵には憲吉の手が入っている。三巻七号から十一号まで表紙を飾った「アダムとイブ」である。ジャーナリズムが揶揄的、批判的に騒ぎ立てる「新しい女」に社員たちが紅吉を刺す目の痛さに居たたまれなくなった紅吉は退社を決意する。二巻十一号には紅吉の退社の弁とも言える「群衆のなかに交つてから」と十四連からなる詩「冷たき魔物」、最後の編輯としての「編輯室より」はどれも悲痛の思いが溢れていて感動を呼ぶ。「新しい女」の元凶紅吉が去っても青鞥攻撃は止まず、そこで初めて社員たちは目覚めて敵の正体を知ることになる。らいてうの打って出た「自分は新しい女である」(1913・1、『中央公論』は歴史的発言といえる。

仲間からの非難の辛さに耐えながら、一枝は生田長江から提供された長江が書斎にしていた大部屋で第十三回異画会展出品作を描いていた。五六五点出品で金賞なし、二等二人に父越堂が受賞し、一枝の六曲屏風絵「枇杷の実」は一ランク下がったが褒状一等で続けての受賞に、伏せられていた名が明かされて「新しい女」とわかると沸き立った。異画会の機関誌『多津美』は毎号のように一枝と三兄弟の記事を載せ、画展史上初の総見が行われ、新聞記者、女優、長江はじめ妻子同伴の坪内逍遙までの参観に上野の山は賑わったと書いている。二十歳になったばかりで画歴も浅いの好きでもない日本画で連年受賞は見事というべきだろう。この絵にまつわるエピソードとして、長期滞在の長江宅に家からの使いで一枝の妹の福美が頻繁に来ていたが、同居者兼書生だった佐藤春夫が見初め、春夫の生涯の傑作ともいわれる「泉と少女」「情痴録秘抄」「ためいき」「詩文半生記」などに描かれた「プラトニックラブ」によりて心身甚だしく病めり。慢性の不眠に罹ったというほどの恋をし、結婚を願ったが、懷手して歩くような男(当時の一般の文学者観)に娘はやれぬと父の反対

で結婚できず、福美は画家安宅安五郎と結婚したがその長女美穂は森鷗外の末子類と結婚している。最近、朝井まかてによる『類』が刊行され話題をよんでいる。

マスコミの寵児になった一枝は、天真爛漫な人柄からも記者たちに好かれて随筆や、旅行記の依頼などが来るようになり、青鞥社で非難された悔しさから自ら雑誌創刊を思い立つ。資金は「枇杷の実」が審査員の山田敬中の倍額の破格値で売れた三百円が当てられた。『青鞥』はらいてうの婚資から母が出してくれた百円であり、長谷川時雨主宰の『女人芸術』は時雨の事実婚の夫で売れっ子作家三上於菟吉が出していたことを思い合わせると、二十歳の女性の自力による雑誌創刊は評価されていいだろう。

すっかり仲良しになっていた須磨子の楽屋で決まった誌名『番紅花』は華々しく産声を上げたが、花火のように輝いたものの呆気なく六号で自然廃刊された。表紙絵を富本憲吉に依頼したことから、憲吉にとって三度目の正直として恋が炎を上げて結婚に結果してしまっただ。

『番紅花』創刊号は一九一四年三月一

日発行。月刊。菊版。編輯所は東京市下谷区根岸八三番地（一枝の部屋）。発行は東雲堂書店。創刊号は二二九頁。平均一七〇頁。定価三〇銭。ちなみに『青鞥』創刊号は一三四頁。定価二五銭＋郵税一錢五厘。一枝の人氣だろうが巻末の広告に創刊号二四頁、二号は二六頁と毎号多い。創刊号と二号の表紙絵「壺」、裏絵「女の顔」は憲吉、創刊号の扉絵・カットは小林徳三郎、二号以後のサフランを

図案化したカットは恩地孝四郎。三号以後はぐんと華やかになり、憲吉の自画自彫の表紙絵「人魚の喜びと花をまつる蒲公英の葉」、扉絵は「歌ひかつ昇りゆく雲雀と咲かぬタンポポ」。蒲公英の花は陽の出で開く。それまでは花弁を閉じて寝ているという。早起きして実見したらほんとだった。彫りは一枝も手伝って血を流したりしている。正式同人とは言えぬが当初の仲間は一枝中心に神近市子・小笠原貞子・小林哥津・原信子・松井須磨子の六人。仲間は急速に増えた。執筆者はほかに森林太郎（鷗外）・武者小路実篤・蘭五三子・八木麗・八木さわ（麗の妹）・菅原和子・阿部次郎・青山（後の山川）・菊栄・伊達虫子（岡田八千代）・尾竹ふくみ（一枝の妹）・佐藤春夫・田村とし（俊子）・與謝野晶子・浅井三ツ

井（一枝の妹）・小山内薫・松居松葉・小沢愛園と多彩である。内容は小説・戯曲・詩・短歌・随筆・評論・翻訳と多岐にわたり、演劇面においては演劇誌の要素を併せ持ち、演劇史の資料として有効。豊富な舞台や役者の写真が楽しい。『青鞥』と『女人芸術』の橋渡しの性格に『白樺』の要素を備えた楽しい雑誌だが、一枝の画家への道は途絶えた。

編輯過程、同人達の動静を「編輯室より」が生き生きと伝えている。全号への鷗外の協力ぶりは際立つがその経緯は一枝の書いた「編輯室より」と「鷗外日記」を合わせ読むとわかる。何故漱石でなく鷗外だったのか。『スバル』に載った森しげの「破瀾」を読んでのことだろうか。物怖じしない一枝は未知の鷗外に手紙を出した。その日のうちに明日、陸軍省の自室で待つと地図まで添えた返事が来て翌日、神近と一緒に行き、雑誌創刊の知識と寄稿を依頼する。八日後に創刊を祝った「サフラン」、その翌日「海外通信」が届いた。公務多忙の時期だったのに最後まで寄稿し続けている。創刊号の巻頭を飾った小品「サフラン」は幼時の思い出として、父に聞いた茶葉摘みの抽出からだしてみせてくれたが「干物」で生の

花は父も見ることがないと言う。去年、たまたま花屋で見つけ、球根二つ買って帰ったがそのまま忘れて水もやらなかったのに青々と叢がりできて生命力の強さに驚嘆したという話である。他に翻訳を二号に「毫光」、五号に戯曲「忘れてきたシルクハット」のほかに五号を除く全号に署名「OPQ」で、海外の傑出した女性やその運動などの他ファッションまでが紹介された抜群の面白さだが啓蒙的でもある「海外通信」を寄稿している。一枝との交流、『番紅花』関与は鷗外文学に転機をもたらしている。その頃博文館から原稿依頼があつて読んでいた若山甲蔵の『安井息軒先生』から妻の佐代を主人公に据えた「安井夫人」を書くことになる。鷗外研究者は佐代を良妻賢妻と位置づけているようだが、私は鷗外文学における「歴史離れ」とそれまで描いてきた女性像とは異なり自我を持った女性像造型の始まりの作とみたい（拙著『女々しい漱石、雄々しい鷗外』世界思想社、一九九六・一参照）。鷗外文学に一枝と『番紅花』の果たした功績は大きい。

創刊号掲載の武者小路の「美術に就ての雑感」にも教えられるが、原信子の「プチニー歌劇」と「今日の歌劇」、松井

須磨子の「復活劇の梗概」が興味深い。

カチューシャの歌は津々浦々まで響き渡った。秋田の在の荒川鉾山の長屋生まれの作家松田解子が子どものころ学校から皆で大声で歌いながら帰ったので今でも歌えると歌ってくれたことが思い出される。須磨子は四号に「最近の不平」を載せている。抱月の後を追って自裁したのは一九一九年だが、生前一冊の随筆集（一九一四・七、新潮社）を残している。華やかに桜を散らした赤いカバーが哀しみを新たにするが、抱月の「序に代へて」には、「男性的力張の素描に女性的婉柔の陰をつけたのが女史の芸術であ」り、「舞台の上に漲らす熱力と其の鮮明にして強烈な表情とは、今の日本の女性が達し得る限界を超えてゐる」の一節がある。この本には沢山の舞台写真が載っていて興味を一段と深めているが、「最近の不平」や「感想」は同感される切実さで胸が痛む。即ち、「同じ人間で有りながら、男には許されて女には許されないと云ふのはをかしいぢやありませんか」、「『女の癖に』といふ女子軽蔑の思想から抜けきつて居ない」からで、「女には自分等男よりも遙かに多い負擔をしよわせるのが当然のやう」な不平等に女は「だまつてゐなくちゃならないでせうか」、「私は

すべて私のする事を男として考へて貰ひたいと思います。男と同じ自由を與へ同じ尊敬を払つて貰ひたい」と。直覺的フェミニズムが息づいていて感動させられる。

神近市子は毎号小説を発表しているが市子に小説は不向きだろう。創刊号の下構成の冗長な「序の幕」は、津田塾で青鞥社員であることが知れて学長に呼び出されて青鞥の退社を命じられ、卒業後、青森の女学校に飛ばされる話で、『青鞥』への教育界の反応に驚かされる。面白いのは四号に発表の「N氏のマニユスクリプト」で、赴任先の青森の女学校で青鞥社員であることが知れて免職になり、東京に戻ることになる私小説だが、時代を知る上での好個の作になっている。一枝の紹介で東京日日新聞に入社し、敏腕記者として活躍した後政治家として功績を残していることは周知のことだろう。

一枝は創刊号に詩「私の命」と「夜の葡萄樹の蔭に」と手紙文体の「自分の生活」を載せている。「私の命」に謳われる太陽は、長女の名に「陽」とつけたことが示すが一枝にとって成長したい意欲を表す象徴語なのだ。手紙文体の作品は「同性の恋」が踏みにじられたことによ

る愛についての思考になっている。一枝は「編集室より」が一番面白い。一枝は「K・O」や「リッスラー」名で海外通信も書いているがネタ元はどこだろうか。妹の福美（署名はふくみ）は創刊号に短歌一六首、二、四号に小説「さくらの花」、

五号に「なげき」を発表している。紹介するほどの筋はないが文才を感じさせる。前者は小間使いだったおしほと商売の見習いに來ていた朝治との恋が家制度に阻まれて引き剥がされたあわれを桜をみるたびに思い出されるというもの、後者はおふみさんには結婚したい人がいたのに家長命令で嫌な人と無理矢理結婚させられそうになり自裁する話。女が自由に生きられなかった時代の告発にもなっている。福美が結婚して去った後にその妹の三ツ井が後を受けて四号に詩「西班牙物語ルイザ姫様の詩」、六号に「果物うりの若者のうた」と「白い鳩の死」を載せている。三ツ井の人柄そのままの優しい詩だ。三ツ井には妻を失った後の有島武郎に愛された物語がある。残されているものだけでも有島の三ツ井宛書簡は五九通に及ぶ。有島の弟の佐藤隆三宅で開催された有島の『生れ出づる悩み』のモデルの漁師画家木田金次郎展で受付と雑務を手伝い、木田の絵を一枚買ったことか

ら木田と親しくなり、結婚話も出たが、結局、父に従って日本画家の野口謙次郎と結婚した。野口は東京美術学校卒で帝国美術院展に毎回入選し、特選も得ている風景画を得意としたが、日本画に洋画的色彩技法を取り入れた最初の人だった。三ツ井は何種もの女性・少女雑誌の挿絵や口絵を描いているが、小説も書いている。廃刊が残念。

小林哥津は創刊号に戯曲「春のすゑ」、小説を三号に「苦勞」、六号に「浮世」を発表している。下町娘の粹な風情の描写はいかにも哥津らしい。「浮世」は友人宛の手紙形式だが、東京の下町言葉の「久しく」が「しさしく」のリアルが笑いを誘う。水商売のふさを客の孝三郎が見初めて結婚したものの姑にいびられて離婚させられ、新しい妻に諸々の男の情けなさを愚痴ったものだが、「お亭主があつても、ないやうなみじめなおかみさんなら、ふつつついに候」が利いている。小笠原貞は創刊号に「さふらの香」、二号に「姉と妹」の小説を発表。前者は結婚して遠隔地に行った文子が出産のため帰ってきたが蒲柳の質らしく、苦しみ産んだ赤子は元気で一日一成長し、その傍若無人ぶりに母親の文子は追いつけ

ない。姑と「嫂」の溺愛を淋しく眺めるしかない。母から医者薬よりもサフランを渡される。サフランが薬だなんて知らなかった文子はどうぞ効きますようにと祈る思いで香をかいだ、という平凡な作。「嫂」の夫の兄も、子の父の夫も姿を見せないのは不自然。後者は上下構成で上は両親を亡くした姉妹の姉の多鶴子は三十を過ぎようとしているが浮いた話一つなく必死に働いて妹の世話をしてきたので、恋愛にうつつを抜かず妹が許せない。官庁から洋行の話があつてそれは彼女の夢でもあったが、時を同じくして応諾したい条件のいい縁談がくる。悩んだ末洋行をとる。大勢の見送り人と別れを惜しみ、銅鑼が鳴る。そこに飛び込んできた久しぶりの妹に、恋愛なんかより勉強せよを別れの言葉にするが、船が出て、一人になると、妹への態度は正しかっただろうか、と悔やまれる。下は妹美代子の視点。姉から受けた恩義は感謝しきれないが、勉強勉強で恋人と引き剥がされたその姉はもういない。彼と一緒にどんな苦しみにも耐えて立派に生きて行こうと決意すると嬉しくなつて血がのぼる、と言う平凡な作。

八木麗・さわ姉妹はほとんどの号に登

場している。創刊号には「二人の歌」として二人の短歌を。二号にはさわが詩「影のかげ」、麗は「ピエールとジャン」を読み「を」。仏文学者で幾つもの名作の翻訳をしているさわの詩はフランスの香がする。麗の評論は本格的モーパーサン論だ。しかも自分の言葉で書いていて、私も論じてみたくなった。そう思わせる論なのだ。さわの三号掲載の「断章」は思わず口ずさみたくなる詩だ。四号にはさわが短詩五編、麗が小説「別れの手紙」を発表。くどいが面白い。進学のために来た伯父の家で出会った東北大生との恋は真剣だが伯父の娘が結婚相手にされていて彼は承諾したが「私」は反対。そこにきた私の結婚話に気が進まないが親のため家のためと諦めて一度は承諾したものの考えた末、自己の尊厳を守るために拒否して、八丈島で教師として一人で生きる道を選ぶ。「私は全く新しい私になって、新しい生活に入る」る覚悟で終わる。甘ったるいが当時では先進的。五号にさわの長詩「甘き呪」、六号に長詩「リラの香」。麗の六号発表の小説「C夫人の或る朝」は読み応えがあつて廃刊が惜しまれる。最終号になつてしまったこの号には與謝野晶子の詩「蟬」、長谷川時雨の戯曲「月に住む」、珍しい手法による伊達虫子

(岡田八千代)の「或る夫人に」は「つゞく」とあって残念。五号は演劇中心の号。小山内薫の「レッシング座で見た芝居」、松居松葉の「女優片々草」、小澤愛園の「人形芝居について」、原信子の「オッフエンバッハ」と続き、世界の女優の写真が十葉も添えられていて楽しい。

紙幅を失ったが割愛できないのは青山(後の山川) 菊栄の翻訳である。コロレンコの「マカールの夢」(二号)と小説「盲楽師」(四、五、六号)の面白さは拔群だが、注目されるのはカーペンターの「中性論」(三、四、五号)で、「同性論」にも触れている。ほんの少しだけ紹介する。「あらゆる人間は男女の両要素を有つてゐる。たゞ常態の人の場合」は「一方の要素が他の要素よりも大なる発達を遂げてゐる」ということで、「異性間の恋愛には『種族の蕃殖』なる特殊の任務」があるが「同性の恋には社会的の勇烈な事業と精神的子孫の生殖——即ち吾等及社会に変化を来す哲学的思想及理想を生む独特の職分」がある等々、蘊蓄に飛んだ論が展開されている。中性や同性愛を穢らわしいなどとみる視点は微塵もなく、むしろ相手を思いやれ、相互成長できる関係としている。私たちはその例証を幾つも知って

いる。宮本百合子と湯浅芳子については私は湯浅から具体的に聞いている。矢田津世子のコントから芸術的完成度の高い純文学作家への成長には大谷藤子がいだし、吉屋信子と門馬千代も「どちらかがどちらかを犠牲にすることのない関係」だった。フェミニズムに通ずる。一九一四年という時代だったことを考えるとカーペンターにも、訳者青山菊栄にも、これを三号にわたって採りあげた『番紅花』にもその先見性に感動させられる。

いわゆる大正デモクラシー(1911-1931年)の時期に創刊された女性雑誌は二三四種でそのうち女性の手による雑誌は三三種という(『大正期の女性雑誌』近代女性文化史研究会、大空社、2016・2 新装普及版)が、三三種のほとんどが運動体の機関誌であり、『番紅花』は文字通り資金からすべてが女性の手作りなのに三三種から排除されている。何故か。『番紅花』は女性雑誌だが男性を排除していない。文学と演劇をターゲットとしているが世界各国の女性解放やその運動状況まで視野広く、他に見られぬ差別のない雑誌である。最終号になってしまった六号(八月号)の「編輯室より」は一枝が奈良に行つてし

まっていたので八木麗が、九月号はもっといいものにした、この号に載るはずだった尾竹さんの「人形を買ふまでの恋」も次号まで待つて貰いたい、などあって予想外の突然の廃刊だったことがわかる。憲吉との結婚が決まってしまったからで、一枝の責任は重い。一方で驚嘆は二十歳で一九一四年のこの雑誌に一枝は原稿の擱筆日をすべて西暦で記していることである。元号は「君主」の時間に民衆を従わせる制度であり、中国に倣つて「大化」に始まる前近代の遺物で、主権在民の民主主義国となった現在では使うべきではないのに公用語にまで使われているのは憲法違反に当たるが、まだそのような視点がなかった国民は皇国民だった時代に西暦使用で一貫している一枝の感覚には脱帽される。ついでに言うのだが、結婚後、一枝は夫の憲吉を他者との会話その他の中で終生一度も「主人」を使っていない。夫婦は対等の考えによる。『番紅花』廃刊後の憲吉との生活にこそ、一枝という女性の真の新しさとそれに比例しての喜怒哀楽、とりわけ屈辱的苦悩への悩みなど本当の一枝物語は始まるのだが、今はそこを語れる機会の到来を待ちたい。